

道徳授業の「落とし穴」①

～「頭でっかち尻つぼみ」～

土田 雄一



1. 道徳授業の「落とし穴」から授業を見つめる

これまで、たくさんの道徳授業を参観してきたし、私自身もたくさんの道徳授業を行ってきた。「すばらしい！」と絶賛した授業もあれば、「もったいない」と感じた授業もある。そこで、本連載では、「もったいない」と感じた授業を分析し、「授業者が陥りやすいポイント（落とし穴）」として整理し、その対策を述べていきたい。

2. 道徳授業の「落とし穴」

①頭でっかち尻つぼみ。

②欲張りすぎて時間内に終わらない。

上の2点は、研究授業でありがちな「落とし穴」である。「導入を工夫」して、子どもの意識を引きつけようとするあまり、「出し過ぎ」「丁寧やり過ぎ」等で、なかなか本題に入れない。「写真等の視覚資料を使う」「子どものアンケートを活用する」「クイズ形式で注目させる」「関連するこれまでの学習を振り返る」等々。それぞれ意図することはよいのだが、丁寧にやり過ぎて時間がなくなる、本題での深める時間がなくなる等の「落とし穴」に落ちてしまう。

pattern①「研究授業だから……」と、丁寧にスタートしようとしすぎる

pattern② 導入に力をそそぎ過ぎる（準備すぎ）

pattern③ 時間配分の見積もりが甘い

pattern④ 期待する子どもの反応がないため、教師がしゃべりすぎる（台本へのこだわり）

では、このような「落とし穴」に落ちないためにはどうしたらよいのだろうか。

3. 「落とし穴」対策

①「何を目標した授業なのか」考える

これは、道徳だけでなく、すべての教科にいえることである。「本時の授業は何を目標した授業か（ねらいの明確化と確認）」「考えさせたいのはどこか（中心場面の確認）」「そのために押さえておかなくてはいけないことは何か（前提の確認）」。授業の基本をしっかりと確認したい。

②「ぜい肉」をそぎ落とす

導入が長い授業は、無駄が多い。「本当に必要か？」「子どもの意識の流れは？」「説明が長すぎないか？」等の観点から考える必要がある。

③「時間配分」をシミュレーションする

時々、指導案の段階で「この授業は45分で終わらない」と危惧するものに出会う。盛りだくさんなのだ。提示する資料が多い、書かせる活動が多い、グループワークが多い、動作化・役割演技等々。指導案上は、様々な工夫をしているように見えるが、実際には、やるが多すぎて時間がなくなり、「尻つぼみ」の授業になることが多い。対策として、授業の時間管理を「批判的思考でチェックする」ことを薦めたい。「本当にこれでよいか？」「必要か？」「終わるのか？」「捨てるとしたら何か？」等を検討しよう。

④「子どもの意識の流れ」を意識する

私が授業で大切にしているのは、「子どもの意識の流れ」である。子どもが導入から、資料提示、発問に対して、どのように受け止めて意識が流れていくのかを考えて授業を構成する。「時間だから」と子どもの意識の流れを分断するような授業はもったいない。（実はよくある。）何を削ればよかったのか検討したい。

⑤はじめから時間を延長する

「どれも必要、大切」と考えるなら、当初から時間を延長した授業構成にした方がよい。「45分の授業が60分」になると「60分の授業が60分」なのでは、子どもの意識も異なる。「時間を忘れて子どもたちが熱中した授業」を参観したこともあるが、まれであり、多くは教師の空回りである。計画段階での大胆な修正や発想の転換も考えたい。

4. 「落とし穴」に落ちたら

冒頭の「落とし穴」に落ちたらどうしたらよいか。「指導案を捨てよう」。授業の「ねらい」を確認して、そぎ落とす点を考える。中心発問と、子どもとのやりとりは極力確保する。考え抜いた「中心発問」が生きるように授業を再構成しよう。目標達成のためには「捨てる勇気」も必要である。